

## 02

## 中日新聞「エンタ目」連載コラム再録

2021年4月1日～12月16日掲載まで

The archive of the column on Chunichi Shimbun  
「Entame」

From the article 2021 April 1 to December 16.

映像メディア学科・教授  
Department of Visual Media・Professor

仙頭 武則 Takenori SENTO

## はじめに

2月16日。『弊紙朝刊カルチャー面で、映画や音楽、演劇、放送界の方々による寄稿「エンタ目」を連載しています。新年度からの筆者として仙頭さんにぜひ加わっていただきたいと思い、お願いする次第です。これまでの映画製作や映画祭での裏話、大学での指導、交友録など幅広い題材から、興味深い文章をご執筆いただけるのではと思っています。月一回、1,000字未満、(中略)何とぞ、前向きにご検討いただけますと幸いです。』というメールから、2021年4月連載が開始されたコラムを担当記者のメール等を交えて再録する。

## 第一回 4月1日掲載

## 『蓮実重彦氏の「扇動」』その風に乗りたい

自主映画制作に明け暮れた学生時代、企業で営業職の頃、その人の著作、評論にはとにかく目を通した。人生は一度きりだと至極当たり前のことを悟り、平成の始まる頃、一念発起して転職した。五十の劇場公開映画をプロデュースしてきたが、その影響は今も昔も計り知れず。その人とは、蓮実重彦氏である。信頼する映画評論家にして元東大学長、その薫陶を得た門下生達の多くは今も映画制作の最前線で活躍し、私も彼らと多数の映画をつくってきた。

柄にもない大学教授の職に就き、いよいよ映画、大学どちらを向いても頭が上がらない、全くもって恐ろしい存在だ。

先生が拙作の完成試写に来て下さるようになり、そんな内心など見透かされてはならぬと虚勢を張り、余裕の素振りで談笑などしてみせた。ある時、会話が本当に弾み、何かの拍子に周囲を見回すと、監督、スタッフ、キャストまでが起立、整列、反省深き生徒のごとく私たちを見ている。「天覧試写ですね、まったく」とスタッフ眩き、一同苦笑。

そんな蓮実先生が初の新書『見るレッスン 映画史特別講義』を昨年末に刊行された。年始、読んでみろよと意味深長な連絡が知人からあった。覚悟してその書を手に取った。冒頭僅か数ページで「仙頭武則さん、かつての(略)すごさはもうない」とあった。動揺あらわに、一気に読み進むと「プロデューサーの不在」という見出しの項には「プロデューサー的才能はあるが、今は教鞭をとっていて、弟子が育っていない」と書かれていた。全国紙の映画担当記者氏からはソーシャルメディアで「蓮実先生の煽動装置、健在(笑)」ときた。

40年の時を経て、氏の著書に名が載ったのは確かなのだよ、しかもプロデューサーに言及された事など殆どなからう、祝福せねばならぬ出来事ではないか、喜び給よ、君。

巨人の煽動で巻き起こった風だ、受け止め、立ち向かうな

どやほだろう、ならば助走をつけてその風に乗れ、どこまで飛んで行けるか試してみよう。

実は、もう、縁と友情と恩を授かり助走は終えて、乗っておりますよ、風に。かつての“すごさ”とは違う、軽やかに舞う姿を、ご期待あれ。

各回の見出しは担当記者が付ける。校正され、誌面には関連する写真が毎回掲載される。校正に一言一句拘る執筆者もいるそうだが、私は一切気にしない。私が撮った写真を使うこともあるが、本稿は新聞に掲載された校正済の原稿を再録するが、写真は掲載しない。

## 第二回 4月29日掲載

### 『青山真治監督との親交』血より濃いつながり

血よりも濃い繋がりとは夫婦だと思うが、世の中にも血よりも濃い繋がりがある。私とおお(語尾上がる)ちゃんの関係はまさにそうだ。彼は私を「せんさん」と呼び、私はメールでは宛名を何故か「あおどの」と書く。沖縄にいた頃は夫人のとよた真帆さんと何度か訪ねてきてくれた。週に一度は何かしらの方法で連絡を取り合い、ここ数年は互に行き来しては顔を合わせ、映画と音楽とエレキギターの話を数日を経過し「そんじあ、また」と別れる。時を忘れて空が白み始めるまで何時間も女子中学生のように電話したこともある。シナリオハンティングと称して旅に出る、彼の教え子、私の教え子、私の妻が同行することもある。彼が大病をしてその容態が人を介して電話で伝えられた後、私は声をあげて泣いた。私の背中を撫でながら妻は「あおちゃんが元気になってくれたら、二度とこんな心配をさせるなどと言ってやる」と私より大粒の涙を流した。その機会もなく時は過ぎた。後悔のないようこの場で告白しておく。あの時、私たちの映画の台詞が咽んでいた、「生きろとは言わん、死ななくてくれ」。

初めて会ったのは1993年6月だったそうだ。日付は「あれ、いつだっけ」と訊けば、いつも彼が「ちょっと待ってよ」とメモを取り出し教えてくれる。あらゆる業種で名を成す人物は例外なく克明に出来事を記している。「歴史とは現在と過去との対話。過去を主体的にとらえることなしに未来への展望をたてることはできない(E・H・カー)」。彼の記録は私たちの「歴史」であり、未来への展望だ。私など、彼の記録の存在をよいことに近年急速に錆びつつある記憶だけを頼りに生きている、それでも未来はくると信じるけれど。

その日、彼は月刊誌の映画ライターとして私をインタビューにやってきた。本題のインタビューもそこそこに、時間を大幅に超過してクリント・イーストウッド作を語り、意

気投合した。後日、私のチームに合流し、助監督、監督補として昼夜を問わず多忙で濃密な日々を共に過ごすことになった。幾重にも連なる時間が醸成されて「現在」がある。

「人生唯一の就活面接だった」とメモにはあるそうだ。

5月30日、青山真治氏「公表しない、身内のみ」との病の知らせに妻共々急遽上京し、青山夫婦と時を過ごす。妻が本稿記載の本紙を渡すと、彼はその場で読んだ。のちに本人が公に寄稿連載している『宝ヶ池の沈まぬ亀』には病名こそ明記していないものの通院、検査の様子が克明に記述されている。『宝ヶ池の沈まぬ亀 ある映画作家の日記2016-2020(青山真治著)』は2022年2月に5年分が加筆修正されて出版される。私も毎回のようには登場する。

## 第三回 6月3日掲載

### 『映画振興に力注ぐNZ』国民の幸せ第一いいなあ

一九九二年に人口約五百万人の島国ニュージーランドで製作されたスプラッター・ホラー映画『ブレインデッド』について書いておく。作品の好嫌や内容を玩味するためではない。『リング/らせん』『女優霊』、TVホラーシリーズ『ダムド・ファイル』等のホラーをつくっておきながら、その制作では百回同じ場面を見ても必ず同じ箇所で驚倒するほど、人一倍怖がりの私など本作の過度な残酷描写は「怖い」を凌駕して「苦手」と断言する。それでもこの映画について記しておきたい。

残酷描写極まりないこの映画はニュージーランド政府の映画産業振興機関「ニュージーランド・フィルムコミッション」から資金提供を受けて製作されている。助成金すなわち税金が投入されている。「ニュージーランド・フィルムコミッション」のサイトを確認すると「積極的に映画製作者や作品に資金を援助し世界に売り出しています」とあり、本作についてはシノプシス(あらすじ)、各国のファンタスティック国際映画祭での受賞や上映履歴、予告編と共に助成の事実も掲載されていた。

監督はピーター・ジャクソン。私と同年齢、誕生も同じ月という無意味な情報に続いて『ブレインデッド』の次作『乙女の祈り』はベネチア国際映画祭銀獅子賞、さらに次作は『ロード・オブ・ザ・リング』三部作を監督、ロケ地はニュージーランドだ。私はとりわけ彼の『ラブリー・ボーン』を慈しむ。

二〇一七年、ニュージーランドでは三十七歳の女性アーダーンが首相に就任、在任中に産休と育休を取得し出産、二〇年三月、アーダーンは「国民の幸せは国の義務。国民が健康であれば観光も経済もやがて戻って来ます」とソーシャ

ルメディアで発信し、手厚い補助とともに、様々な感染抑制対策を迅速に打ち出し、十月には首相に再選された。二一年春、首都ウエリントンでは多くの人が通常の生活をおおむね取り戻し、マスクも着けていないそうだ。

現在のニュージーランドの様子を距離より遙か遠くに思える異国の出来事と羨望し、『ブレインデッド』への助成は偶然ではなく必然だったのだと足元の日々と格闘しながら実感している。

『アメリカン・ユートピア』が観たいとひたすら渴望する日々。

#### 第四回 7月15日掲載

##### 『再編集を突っぱねて』カンヌで「ユリイカ!」叫ぶ

『地獄の黙示録』の名パブリシスト(広報担当)と5年契約で、前年のカンヌで知り合ったフランスの協力プロデューサー、不可欠とされるセールス・エージェントも同国の新興会社と契約、盤石の態勢を二年かけて整えた。一九九七、九九年、監督週間で二作品受賞し、実績も十分できた。プリントを映画祭事務局に直接送り、選考試写は大好評だったとエージェントから連絡があった。

尊敬するヴィム・ヴェンダース監督に「一度では意味がない、何度も来いよ。」と激励され、目標としてきたコンペ入選がついにかなおうとしていた、2000年、春のこと。

ある朝、FAXと国際便でVHSが届く。FAXの差出人はジル・ジャコブ、世界の映画関係者でその名を知らぬ者はいないカンヌ国際映画祭の会長だ。「大変すばらしい作品をありがとう。しかし無名監督の三時間三十七分の作品は観客には長すぎる。三時間以内に再編集してほしい、すばらしい席を用意しよう」。VHSは協力プロデューサーが三時間に再編集したものだった。

夕、監督来社。最初につながった五時間三十分編集版から場面を落とし、構成を変え、議論と試行錯誤を繰り返し、一コマ(一秒二十四コマ)落とすところまで話し合った日々を思い返す時間が流れる。「手を加えるところはもうない」と改めで一致し、互いに晴れやかになった。

深夜、「これからつくるすべての作品をあなたのアドバイスを編集することはできないので、私たちは自分が納得したものを完成とします。再編集はしません。」とつづり、明け方に返信した。

数週間後、「コンペティションに招待します」とFAXが届く。更に数週間、通常なら夜の上映ともう一度上映があるが、昼間に一度だけ上映すると連絡があった。

ソールド・アウトになったカンヌ上映当日、昼間の上映なのでタキシードは着ない。しかし、胸を張って赤じゅうたんを踏みしめ、終映と共に響き始めた万雷の拍手に私達は長く包まれた。重要な記者会見、最初の質問者が私を指名し「大長編だが国際版等の短縮版が出てくるのか」。私は「これからのバージョンしか存在しません」と答えると会見場に拍手が湧き起こった。「こんなすばらしい光景に出会ったことがない」とパブリシストが何度も耳元でささやいた。心の中で「ユリイカ!(わかったぞ!)」と私は叫んでいた、暴虎馮河な38歳だった。

8月10日。『コラムの文章記載について、著作権は仙頭さんに帰属しますので問題ありません。可能でしたら、初出について「いついつの中日新聞」とそれぞれ記載していただけると幸いです』、と言うことで再録に至った。

#### 第五回 8月12日掲載

##### 『映画は集団の記憶装置』『敗戦』の教訓 描き続けて

まず、十三作の日本映画のタイトルを製作年代順に監督名と共に並べる。『ひろしま(1953)』関川秀雄。『野火(1959)』市川崑。『血と砂(1965)』岡本喜八。『男の顔は履歴書(1966)』加藤泰。『にっぽんのいちばん長い日(1967)』岡本喜八。『激動の昭和史 沖縄決戦(1971)』岡本喜八。『赤い天使(1966)』増村保造。『陸軍中野学校(1966)』増村保造。『軍旗はためく下に(1972)』深作欣二。『この子を残して(1983)』木下恵介。『東京裁判(1983)』小林正樹。『海と毒薬(1986)』熊井啓。『美しい夏キリシマ(2003)』黒木和雄。『美しい夏キリシマ(2003)』は私のプロデュース作でもある。個々の作品についての説明は省くが、「太平洋戦争と日本」を多角的かつ多面的に捉えることができるよう選んだ。主演の若尾文子さんがあまりにも酸鼻極める場面が多く、完成した映画を観ることを躊躇ってきたと語る『赤い天使』もあえて加えた。

日本が『敗戦』し、まもなく七六年目を迎える。戦争を経験した世代は少なくなりつつあり、記憶の継承が叫ばれて久しい。

ウィルスによるパンデミックが世界に広がり、各国は感染封じ込めと経済活動の両立に苦闘している。このウィルスは、人々の間の分断も浮き彫りにした。加えて日本では五輪が状況をより混乱させた。ソーシャルメディアではここに至る様子を兵站の支援なしに決行された1944年三月の「インパール作戦」にたとえる言説も多く見られた。

「始まってしまったので、もう止められない」「起こってほしくない事は起こらないと思い込み、それ以上考えなくな



る」という戦時下の軍令部、国民双方に溢れていた情緒的で楽観的な思考がウィルス対策や緊急事態宣言下の五輪を通じて今日まで続いていたことが露呈した。当時も今も意見が対立する社会や組織の緊張を解くには、それぞれの主張を支える根拠や決定へ至るプロセスが、十分に情報開示されることが肝要だが、情報開示どころか『隠蔽』『改竄』まで許してしまっている。

『敗戦』を『終戦』と言い換えたまま、多くの命を犠牲にした『失敗』を忘却の彼方へ葬り、私たちは弛緩してしまっている。

映画は「集団の記憶装置」だ。しかし、映画をはじめとするあらゆるメディアが今は記憶喪失装置と化してしまったかのように思えてならない。

歴史から学ぶ意志を持ち、真摯な眼差しで向き合えば、きっと、映画が多くの将来の教訓を投げかけてくれると私は信じている。

## 第六回 9月9日掲載

### 『映画プロデューサーの仕事 上』製作の全てを把握せよ

駆け出しの頃、サンダンス国際映画祭のプロデューサーラボに参加した時のことだ。俳優、プロデューサーのピーター・フォンダ氏が特別講師として登場した。「プロデューサーは映画づくりの全てを知っておかなければならないのだ」と語り始めると、質問者が「どこまでですか」と手を挙げた。「ジェネレーターのレンタル料は?取引銀行の借入れの利息は?」とすかさず氏が質問を切り返し「すべてと言っただろ」と厳しい口調で付け加えると会場が静まり返った。氏が会場をゆっくりと見回し、映画の中で見せるような満面の笑みを浮かべると、ようやく緊張が解けた。撮影現場には欠かせないジェネレーター(発電機)のレンタル料金と投資以外の資金調達手段である直接融資の利息まで、プロデューサーの仕事の範囲の広さを端的に示す見事な表現だった。

講義の中では「『イージー・ライダー』はヒットする映画を作ったのではない、私たちは面白い映画を作ろうと思っただけだ」と言っていた。当時持て囃されていたマーケティング主導の「ヒットの法則」に嫌悪感を抱いていた私にとって目指す方向がより明確になる心強い言葉だった。

十五年ほど前、欧州で映画プロデューサー育成セミナーが開催され、世界のインディペンデント・プロデューサーが集った。私はパネリストとして参加し、「インディペンデント・プロデューサーは一作品作るたびに毎回ベンチャービジネスのCEO(最高経営責任者)である」と登壇者で一致した。

大学で、私の経験を基に「映像プロデュース論」を講義している。

「プロデューサーは父親、監督は母親、完成した映画は子供」という私の理念を説明することから始める。この理念に沿って、企画、脚本、資金調達、スタッフティング、キャスティング、予算管理、宣伝、興行、ブルーレイや最近の配信の状況まで講義していく。学生の振り返りコメントは「驚愕」「衝撃」「知らなかった」「認識を改めます」という言葉で毎週埋め尽くされる。映画プロデューサーの仕事が如何に世間に認知されていないかを痛感し続けながらも学生たちそして彼らを通じて一人でも多くの人に伝わって欲しいと願っている。「映画プロデューサーになりたい」と言う学生が現れたりすると、続けた甲斐があったと胸を撫で下ろす。でも、大変だよ、よく考えてね、と同時に心配にもなってしまうのだが。

## 第七回 10月7日掲載

### 『映画プロデューサーの仕事 下』企画者 製作の原動力

大学で「映像プロデュース論」を講義しているが、最終レポートは「プロデューサーとは」を提出してもらっている。『映画作りの数ある専門職の中でも、全権を掌握しているのがプロデューサーだ。作品の撮影や演出については監督が判断するが、その監督を任命できる立場にいるのが、プロデューサーである。他にも出演する俳優・女優、脚本家、さらに撮影・照明・録音スタッフなどの任命決定権を持っている。作品が目指す方向性を明確に掲げて、製作予算の調達、撮影後の最終編集、封切り前の宣伝活動まで、一切の業務を指揮する、映画作りの総責任者だ。映画界を目指す人の憧れの職種の一つだといえる。映画をビジネスとして捉える経営者としての視点と、スタッフ並びに関係者を指揮するマネジメント力がある人に向いている。また、宣伝や著作権にまつわる守秘義務や、コンプライアンス管理などの法務の知識もなくしてはならない。一度に多業種の人とも話を進めていく仕事の性質上、フットワークの軽さやコミュニケーション能力も求められる。』とある就職情報サイトにあったが、レポートで提出されたらS.A.B.C.D五段階評価でBにするだろう。

近年、多岐にわたるプロデューサー業務は分業が進み、映画のクレジットを見ればわかる通り、エグゼクティブ・プロデューサー、プロデューサーに複数がクレジットされている。監督や主演俳優がクレジットされていることも多い。例えば諸外国では編集は編集権という権利で、その権利はプロデューサーにあり、最終決定権は監督にない。分厚い契約書にはポスターに表記される俳優の順まで決められ、その契約書をまとめるのはエンターテインメント・ロイヤーという専門弁護士だ。時にはその弁護士がプロデューサーとしてク

レジットされていることもある。

2020年、ベネチア国際映画祭で金獅子賞受賞の「ノマドランド」は主演のフランシス・マクドーマンドが原作を気に入り映画化権を取得、監督を探していたトロント国際映画祭で「ザ・ライダー」を観て、この作品の監督クロエ・ジャオに「ノマド・ランド」を依頼した。「ノマドランド」にはフランシス・マクドーマンドがプロデューサーとしてクレジットされている。映画プロデューサーは管理職だと思われがちだが、企画者であり、映画製作の原動力なのだ。「映画はプロデューサーで動く。」と先人から教えられた。

10月26日。担当記者より金沢へ異動とメール受信。あまりの落ち込みように「金沢は良いところだ、楽しんだら良い。」と励ます。11月12日。新たな担当記者と挨拶。大学の同窓、学部まで同じの後輩と判明。以後、メールの宛名は先輩、後輩になる。

## 第八回 11月18日掲載

### 『映画『CHAIN・チェイン』』幕末と現在 結びつける

「映画は社会を映す鏡」である。近年では作品内容を社会の反映、あるいは創作者が考える社会の反映だと捉える「社会反映論」と受け手が映画に期待や願望を投射する「社会投影論」に区分されているが、ここでは「社会反映論」として用いる。

2011年以降の日本映画を欧州の批評家が語る際には「3・11以降に撮られた映画であるかどうか」が「社会反映論」に連なる言説として定着した。数年後には「ポスト・コロナ」映画であるかどうかで世界中の映画に於いて論じられることになるだろう。

2019年、コロナ禍前、京都で『CHAIN・チェイン』という映画の制作に参加した。

監督は、巨匠たちの助監督としてその名を知らぬ者はいない達人、監督作も多数、とりわけ前作「正しく生きる」に私は痺れた、尊敬する先輩、福岡芳穂さん。脚本は「ああ、荒野」「宮本から君へ」など近年活躍目覚ましい港岳彦さん。撮影は「シコふんじゃった。」等の栢野直樹さん。阪本順治監督作を手がけてきた女性プロデューサーの先駆者、椎井友紀子さん、私は勝手に「姐さん」と呼んでいる。「CURE」をはじめ多くの作品を自在に編集してきた蒲郡出身の名編集マン鈴木欽さんはじめ重鎮が顔を揃えた。配給宣伝は海外の良作を日本に伝え続けるマジック・アワー代表・有吉司さん、私も今や還暦だがこのお歴々を前にすればほんの若造だと安心するやら怖いやら。そんな大先輩たちが京都に集い、「イン

ディーズ映画だ」と取り組んだ。

打ち合わせなどとは程遠く、殆どは立ち話で、怪しい雰囲気醸し出しつつ、私と監督は会話を重ねていった。「どうしてCHAIN?」「できごとの連鎖、時間の連なり」「なんでCHAIN?」「鎖=縛るもの、我々は様々なものに縛られて生きていると。自縄自縛も含めて。恣意的な解釈だけど、つながり、結びつき。」「場所」を、それが持つ「時間」と結びつけ可視化することはできないか。」これが大命題となって製作は進んでいった。歴史ある京都という「場所」の幕末と現在という「時間」を結びつけて見せる。会津藩が管理組織していた新撰組とそこから離脱した集団である御陵衛士の争い、会津は今の福島県、「CHAIN」はまさに「創作者が考える社会の反映」「3・11以降に撮られた映画」だ。幕末が舞台ではあるが、時代劇を作ったつもりはない。幕末を借りた現代劇と言いたい。

11月26日、まずはテアトル新宿から公開が始まる。

11月19日。『実は、どうしても聞いて頂きたいお願いがあります。「エンタ目」ですが、もう1年継続で書いて頂けないでしょうか。仙頭さんの回は社内外でとても評判が良く、本日付の記事も読者から「CHAIN、観たくなりました」とコメントが来しました。私は今回が初めての担当でしたが、「社会反映論」と「投影論」など、読み応えがありました。ますますご多忙かなとは存じますが、なんとかご検討ください。』。28日。『アメリカン・ユートピア』『オールド・ジョイ』、爆音映画祭IN松本にて鑑賞。

## 第九回12月16日掲載

### 『映画『CHAIN・チェイン』』物語追わず 画面凝視して

映画に「物語は映っていない」。映っていないストーリーの展開を予測して、映画の幕が開くと「それで、どうなるのだろう」とスイッチが作動し、実は「見ていない」。

大画面に映る人物の繊細な仕草、あるいは躍動感に満ち溢れた動き、遠くに映る人、建物、自然の風景、全てを愛でるように凝視していれば、より多くの情報をも視覚から、あるいは耳を凝らして聴覚から、吸収することができれば、思いもかけぬ場面で、言葉にすることが容易ではない感情が湧き上がり、溢れ出す。その感情の連続あるいは連鎖こそが、映画にだけ許された「映る」物語だとあえて言おう。

明日、名演小劇場で公開される拙作『CHAIN/チェイン』で「映っていることだけを凝視する」鑑賞法を当事者である筆者が薦める減多にないこの機会に是非試みて頂きたい。18日、19日は上映前に舞台挨拶も行う。

ストーリーを追うことが無用になるよう「前説」として概要をまとめておく。

幕末という時代背景、「油小路の変」という歴史的事実は借りたが、主人公・山川桜七郎は実在しない架空の人物、故に歴史知識の必要性は皆無だが、補足すれば、現状維持に固執する保守派が、反発を監視する集団・新撰組を作る、管理するのは会津藩、理念が違っていると新撰組を脱退した者たちが御陵衛士という新たな組織をつくる。御陵衛士の中には新撰組から送り込まれた間者(スパイ)・齋藤もいる。御陵衛士と同様の思想に土佐藩もあるが、彼らも最終的には藩の存続維持が最優先、という理解があれば十分だ。

想像上の主人公、桜七郎は福島県(会津藩)出身、(藩の)奨学金を得て京都の最高学府で学ぶが、誤って同志討ちをして以来、組織が対立する「戦い」そのものを否定する。保守派、改革派が将来を思い対立する緊張の中でも、二度と組織には属さず、あらゆる組織の崩壊さえ心底では望む「個人」となる。組織の掲げる理想を疑い、無思考に組織に属する者は善良と思える者さえ最後には斬り捨てる、何よりもまず「個」として強くあることを自ら体現するための残酷な暴挙だ。心にあるのは「郷里」に残した「不遇な妹」、つまり「福島」と「弱者」のことだけだ。

スクリーンに映る人々をひたすら凝視して欲しい。そうすれば、きっと、ラストシーンであなたは胸が張り裂けるだろう。それは、私たち製作者の自戒を込めた「叫び」、もしかすると、あなたの「叫び」となるかもしれない。

2021年、鑑賞した映画は243タイトルだった。